

研究報告集・第38集（抜刷）

生活重視の思想に基づく生活世界の科学性の成立条件

金蘭短期大学 三 石 博 行

生活重視の思想に基づく生活世界の科学性の成立条件

三石博行（金蘭短期大学） h-mitsuishi@kinran.ac.jp

はじめに

工業化によって失われようとする伝統的生活世界を守るために19世紀にアメリカで生活学は誕生した。より良い生活を実現するための実学として生活学は発展してきた。この学問は、人文社会、自然科学、工学、医学の広範な学問領域の公理を援用したプラグマティズム的な学際方法によって生活という広範な課題に取り組んできた。

近代合理主義を生んだ17世紀以来、科学技術は発展を続け、20世紀には科学技術文明を形成するに至った。その成果として、我々は豊かな経済社会システム、生活文化環境や自由な生活行為を獲得した。しかし、その反面、巨大化する科学技術システム、生態系に異変をもたらしている人工化学物質、地球規模で進む自然環境破壊、生命倫理を脅かす生命操作の技術の登場、極度に専門化しつつある知的分業体制等々、科学技術の進歩に伴う負の側面を抱え込んでいる。20世紀の終わりになって、現代科学技術文明の進化の方向には必ずしも人間の幸せが約束されていないことに気付きました。

その意味で、21世紀は科学技術文明を点検する文化や社会制度を確立しなければならない時代である。20世紀のはじめに科学技術文明への反省の出発点として生活世界を取り上げたのはフッサークであった。現象学の視点から生活学の科学性を点検し、かつ生活学の展開から現象学を批判しながら、21世紀の人間社会学の基礎課題として生活世界の科学と技術を展開する必要がある。

そこで、まず21世紀における生活者の概念を定義しながら、その中で問われる生活思想の課題を取り上げる。そして、これまでの人間社会学が生活世界を中心に再構成されるための視点を課題にしながら、現代科学技術文明批判としての生活世界の科学の成立条件について検討を加える。この

現象学的な反省の課題から生活学の科学性を点検する作業のみでは、科学技術文明の中から生活重視の思想をもつ科学を確立することはできない。そこで、さらに、生活世界の科学が基盤としている認識論的課題について議論をする。この議論を前提にして、人工物システム科学としての生活世界の科学を提案したい。

1、現代の生活者の定義とその生活思想

1-1、生産し消費する人

A.トフラーは1980年に出版した「第三の波」の中で、プロシューマー(prosumer)・「生産者=消費者」という新語を作り、生活者は生産者(producer)であると同時に消費者(consumer)であると定義した。生活が多様化し豊富な商品を生み出す市民社会になって、生活者は自分の価値や生活スタイルによって生活行動を選択できる。生活が義務でなく、個人的な幸福の追求として語られる時、生活者は生産者と消費者の両面を代表することになる。プロシューマーの社会では「生活を楽しむ」という思想が確立している。生活を楽しむという考え方を背景にした生活者のプロシューマー化は、敏速な生活情報伝達のシステムや多様で豊富な商品生産を可能にした高度な社会経済体制、つまり現代科学技術文明の導き出した結果に裏づけられている。

1-2、環境に作られ環境を作る人

北太平洋のハワイのネマウナ・ロア気象観測所で測定された大気中の炭酸ガス濃度は1948年では280ppmであったが1985年には342.5ppmになり、約40年間で62.5ppmも増加している。これに伴い地球の温室効果も懸念されている。過去100年間に地球の平均温度は約0.8度上昇したことが報告されている。地球の平均温度が上がれば極地の氷河が溶けるため海面の水位が上昇する。ここ100年間

で海水面は約30cm高くなったと報告されている。⁽¹⁾ 環境と人間は相互に関係しあい、人は自分の環境を作り、その環境に人は縛られる。地球規模の大気汚染は、人間活動の結果として、生存条件である環境が作られるということを問いかけている。つまり、人間活動と生態環境の相互関係の理解、生存条件としての生態系との自然契約思想が問われている。生態環境のみならず、人を作っている文化環境や生活環境も人によって作られている。我々は自らの作り出したものに規定されている。その意味で、生態系、風土系、文化系、生活系と精神的世界の連続的な相互依存性の中で生かされている人間実存の在り方を問いかける自然・生態・文化・社会契約思想が現代の生活者に問われている。

1-3、情報を受け取り情報を発する人

高度情報化社会が急速に進み、全世界の人々がインターネットによって通信できるようになった。また、IT革命は、より早く、広く、安く生産や流通を可能にし、インターネットショッピング、電子マネー、電子口座、等々、社会経済システムの情報化を加速しようとしている。テレビのデジタル放送は視聴者の番組参加を可能にし、インターネットが家庭機器となることで、生活現場が情報の発信地となり、多様で巨大な数の情報が発信され、インターネット文化が創造されようとしている。生活者は情報を受け取り情報を発信する生活スタイルを身に付けようとしている。しかし、その反面、過剰な情報、間違った情報やデマなどの悪意ある情報も簡単に素早く伝達されることになる。高度情報化社会では、相互に情報を交換するための社会規範、モラル、思想が問題になる。インターネットで自己を表現できる現代の生活者は、その表現内容に責任を持たなければならない。

1-4、多文化社会で共存しながら伝統文化を維持する人

多文化共生社会の進む欧米では、色々な民族が同じ地区で生活し、多様な生活様式の共存化が模索されている。多民族の共生する現代社会の生活者は、自己の文化性を他者に認めて貰うために他者の異文化性を認める、多文化共生のための文化契約思想が必要とされる。また、経済活動の国際化によって、短期や長期の海外で生活も日常的になり、異なる

文化圏で過ごす生活が一般化する。異文化社会で生活するために、異文化に自己を適応させながらも、自分を作っている文化的アイデンティティーを維持する必要がある。狭義の民族主義や汎国際主義の平等主義でなく、多様性を前提にした共存の在り方と、個別性を前提にした他者との関係を課題にする多文化社会での生活思想が問われる。生活者個人は、ある個別の文化的環境に支配されている。この現実を相互に理解することで、広義の民族性、つまり、多文化共存の生活思想が生み出され、その意味で個人を形成している民族的アイデンティティーの再認識が確立する。民族性や伝統文化を排除するのではなく、相互に認め合う民族間の国際的共存の契約思想、多文化共存の契約思想が国際化する生活スタイルの中で模索されている。

1-5、人権や福祉の生活思想を持つ人

科学技術文明の産物として高度な公衆衛生や医療の技術によって、平均寿命は画期的に延びた。その結果、高年齢人口は相対的にも増加の一途を辿っている。高齢化社会の到来は豊かな社会の代名詞である。高齢化すると身体は衰え、多くの身体的な障害を持つことになる。言い換えると、高齢化社会とは「障害者予備軍」を抱えた社会である。そのため、高齢者の身体的ハンディをサポートする社会経済システムが必要となる。福祉制度は高齢化する社会にとって必要となる。高額な福祉サービスを国民が負担することになる。

また、高齢者とは豊かな人生経験や知識を持つ人々であり、また生き甲斐のためにその資源を活用できる人々でもある。高齢者とは豊かなボランティア資源なのだ。その意味で、高齢化社会は人的資源に恵まれている。人的資源を活用する社会経済システムを開発される。

さらに、高齢者には子育てやマイホーム作りの負担から解放された人々が多く、それらの人々の消費はもっぱら生活を享受したり健康維持などの傾向を持つので、高齢者という新たな市場が生まれ、そのためのソフト開発が進み、新たな企業が発生する。言い換えると高齢化社会を運営するための政治、経済システムが問われている。高齢者を障害者として扱うか、それとも豊かなボランティア資源として活用するか、高齢化社会で問われているものは、生き

甲斐を求める個人の意志を尊重し、人権重視の社会思想であり、その社会思想に乗っ取った福祉社会と人的資源活用の社会・経済システムである。

2、生活思想を基調とする社会経済学の形成過程

2-1、民族国家理念に立つ古典派経済学

民族国家の理念が近代社会の成立の土台となり、近代社会科学の形成の基礎を作り出す。古典派経済学を形成した思想として、民族国家意識を挙げることが出来る。例えば18世紀のフランスでは、農業経済を中心とした社会経済システムが民族国家意識の土台にあり、ケネーの重農主義経済学が生み出される。また、イギリスの植民地主義によって成り立つ社会経済システムを背景にしてアダム・スミスの重商主義経済が確立する。古典派経済学の思想的な土台に民族国家の利益や繁栄が意図されている近代民族国家のイデオロギーがある。また、近代民族国家を支配する商品経済社会、資本主義社会の経済支配構造を解明したマルクスも、民族国家の境内で、資本家階級から労働者階級の国家建設のための経済理論を提起したと解釈できる。古典派経済学が近代民族国家の文化的土台・観念形態を背景に成立している事実は、社会科学の科学性が歴史的要素によって成立していることを意味する。

2-2、国際資本の利益と計量経済学

計量経済学は、実証主義的な科学性に基づいて、経済現象を解析する経済学である。民族国家の利益や民族イデオロギーの立場から距離を置いている。計量経済学は近代国家の思想的脅迫概念から解放されているのだが、それは同時に脱民族国家化している現代資本主義の社会システムを背景にしている。つまり、科学技術文明の先端を走る先進国の国家利益を前提にし、国際資本主義時代の自由競争を推進するための戦略が理論の中に含まれている経済学であると言える。

2-3、生活世界の経済思想と環境経済学

深刻化する環境問題を解決するために、経済学的エントロピーの概念を確立したジョージスクレーベンらによって環境経済学が提起される。この経済学は、経済的資源や経済活動の定義範囲を生態系にまで拡大し、枯渇する資源を守る持続可能な社会体制の確立をめざすために、資源循環型社会の経済シ

テムを提案した。環境経済学の科学性の根底には高橋正立が指摘しているように生活世界の再生産を課題にする経済思想がある。(2)

2-4、生活経営の思想から問われる課題

国民総生産量によって国家の経済力を評価しているのだが、それが必ずしも、国民の豊かさを示しているとは限らない。国民一人当たりの所得、平均寿命は、アメリカやロシアのような大国より北欧が高い。生活者の生活満足度を基準にした評価が最近の話題になっている。人権擁護社会、平和な社会、自然環境を守る社会、伝統文化を維持する社会、豊かさの基準は、生活者の生活満足度の評価として考えるようになってきた。生活経営を国家や企業経営より優先し、生活重視の思想に基づく社会システム、科学技術の在り方を問い合わせる社会経済思想が課題になる。

3、科学技術文明批判としての生活世界の科学

3-1、現代科学技術文明の点検のための人間社会学

豊かな社会や生活をもたらした科学技術文明は、同時に地球レベルの環境破壊に一役かっている。生活重視の思想に基づく生活世界の科学の在り方を考える時、反科学思想からの科学技術批判を避けつつも、現代科学技術文明批判の在り方を課題にしなければならない。(3)

現代科学技術文明の観念形態の構造を分析するために、科学哲学や科学認識論が研究されてきた。特に、17世紀の近代合理主義や18世紀の科学主義の歴史的点検、科学や技術の社会的機能、科学技術の歴史的分析などが展開してきた。現代科学技術文明の点検を前提にはじまった科学技術に関する人間社会学も、次第に専門化し、科学技術史、科学技術社会学、科学技術文化人類学、科学認識論や科学・技術哲学という新しい分野の学問が形成された。今日、現代科学技術文明を課題にする研究は人間社会学の主流になろうとしている。

科学技術文明を点検する作業のキーワードとして生活が取り上げられている。生活重視の思想に基づく科学を基調にすることによって、現代科学技術文明の批判と点検をさらに展開することができる。

3-2、生活世界の科学哲学としての現象学

科学技術文明の在り方を課題にする時、フッサー

ルが試みた「生活世界についての学」の問題提起を取り上げることにする。「生活世界の科学」は「実証的・論理的な課題」のみでなく、その生活世界が成立している全ての条件を取り上げなければならぬと、フッサーは考えたのである。⁽⁴⁾

「客観的科学」とは自然科学に代表される論理実証的な科学であると説明することができる。しかし、「生活世界」の科学は、生活主体の科学認識から認識対象である生活世界の要素を取り除けないため、客観的科学であるとは言えない。つまりそれは、観察主体の認識構造の中に観察対象の世界要素が入り込んでいるため、生活世界の歴史的文化的観念形態によって成り立つ解釈学であると言える。

フッサーは、「客観的諸科学」が根拠とする客観的判断、実証的推論や論理的な思惟などの述定的理論自体も生活世界の中に属し、そこに根をおろしている共同主観的な生活世界の直感を根拠としたものであると考えた。したがって、客観的諸科学の根拠を「生活世界の学」以前のドクサとすることで、合理的で科学的思惟は文化的にも歴史的にも超越した絶対的世界の産物ではなく、ある特定の時代的文化的な生活世界の前提として成り立つ人間的行為であると解釈した。フッサーの考え方から、科学認識活動の間主觀性を提起することで、科学的思惟を生活世界の行為として位置づけることが出来る。

伝統的な近代合理的思想の延長線上に、生活世界の科学を形成することは不可能である。生活世界の科学の成立には、具体的で個別的、文化的で歴史的な生活主体を前提にした「科学性」が与えられ、価値、言語、表象の体系を前提にした共同主観的な科学認識の在り方が、その科学認識の前提条件となる。したがって、それは歴史的で文化的な解釈基盤の上に成り立つ、共同主観的で文化相対的な理解学である。

しかし極論すると、生活世界の科学は、それぞれの文化や時代の観念形態を無批判に持ち込み、その時代の都合に合わせる勝手な解釈、共同体のナルチシズムを充たす自慰的なこじつけ、時代のドグマ的言い分、であると批判される危険性を持つ。生活世界の科学が、同時代の自我が抱えた文化や社会病理への実践的な知であるためには、その自我の理念が、時代的ドグマを自覺的に反省する機能を保障しなけ

ればならない。その上で、生活世界の科学が同時代の自我にとって有効な解釈学や理解学の地位を獲得するのではないかと期待したいのである。

3-3. 批判学としての生活世界の科学

資本主義経済と工業化社会の発達によって破壊された生活世界の復権をめぐって、19世紀に主に二つの視点から問題が提起された。

一つ目は、社会経済システムの在り方を問うものである。エンゲルスが示したように、19世紀のヨーロッパの資本主義社会では機械制大工業の発生に伴い、勤労者の貧困化問題が進行した。単純労働の消耗品となった若年労働者達が被る低賃金や劣悪な労働条件。それによって引き起こされた生活破壊、労働災害や職業病などが、生活病理の原因となっていた。貧困化した勤労者を救済するために社会政策学と経済学が課題となり、マルクスの資本主義経済制度や工業生産体制に対する批判が展開する。

二つ目は、民族学や文化人類学的な視点からの問題提起である。19世紀のアメリカ社会では、工業化によって伝統的な家庭生活様式が失われようとしていた。工業化による家庭生活破壊を課題にして、ビッチャーやリチャーズは家政学を提案した。アメリカ家政学の基調には科学技術文明の引き起こす生活病理の臨床の知としての使命がその根底に流れている。

以上の二つの資本主義と工業化社会批判を継承しながら、日本でも、1937年の東北大冷害を契機に農村の生活改善運動に取り組んだ今和次郎は生活病理学を提案し、⁽⁵⁾ また、笠山京は貧困生活から勤労者を救済する目的をもって生活構造論を形成した。⁽⁶⁾ 戦後になって、パーソンズの社会システム論の影響を受けた松原治郎や青井和夫が生活構造論を展開する。⁽⁷⁾

しかし、1965年代後半の高度経済成長期に入って、貧困生活が解決する中で、生活病理の在り方が変化し、勤労者を貧困から救済する目的で出発した生活構造論の学問的存立基盤が喪失し、1970年代に入ると、次第にその研究の関心は失われた。

1970年代に入って、生活システム論を展開する今井光映は、論理実証科学の一分野となった生活科学を批判し、全体的な生活を分析的に捉える方法、つまりシステム論的に生活学の展開を試みた。今井光映の試みは、生活学が没価値的な論理実証科学

ではなく、全体論的に「生活を癒す」ための理解科学であることを主張した。(18)

しかし、人間生活を扱う科学的方法は、今和次郎の考現学的生活学、籠山京の生活構造論の例からも理解できるように、民俗学、文化人類学や社会学と同じように、フィールド調査に基づく徹底した現場主義の研究方法を取る。その意味で、実証的科学方法論が生活学の研究方法であると言える。

4、生活世界の科学認識の成立条件

4-1、意識哲学批判と生活世界の思想

生活世界の科学の成立の条件として現代科学技術文明に対する批判が挙げられる。歴史的には、客観主義科学では生活世界の科学を充たすことはできないとするフッサーの問題提起から、現象学を人間社会学の方法論として提案する流れが生み出される。しかし、科学技術文明の基本パラダイムである客観主義科学を越えて、生活世界の人間社会学が成り立つための科学認識論は明確に提起されてはいない。

哲学は、ドイツ観念論に於いては、自己認識や世界認識を課題にする学問であった。合理的精神や理念を語る伝統的な哲学は現実の生活主体の実益的な課題を直接に取り上げることはなかった。

19世紀アメリカの家政学、つまり現在の生活学はドイツ観念論批判を真正面から取り組んだ20世紀ヨーロッパ現象学とは異なる思想的背景を持っている。アメリカ家政学の思想的背景としてプラグマチズムをあげることができる。

西洋思想の中には伝統的に知は実践的に世界を改造する力であるという思想があった。知ることは世界を改革することであるという実践的理性の伝統に導かれ、生活主体の課題が登場する。

すなわち、生を理念的に考える観念論に対して、イギリス経験主義を根底にしながら、具体的な生活空間での人間的行為を前提にした実践哲学・プラグマチズムがアメリカで展開されていく。すでに、生活思想を基調にする社会経済学の形成過程で説明したように、生活世界を課題にする人間社会学の形成は19世紀以降の社会思想を土台にしながら、20世紀に入ってから展開された。

フッサー現象学は、主客二元論を土台にしたド

イツ観念論の批判から展開される。その意味で、ヘーゲルの精神現象学を現象学の前哨段階と言うこともできる。しかし、フッサーは意識哲学批判や生活世界の課題を提起するに留まった。現象学が人間社会学の方法論となるためには、フランス現象学、つまりメルロ=ポンティやサルトルや人間学、シランビック・タオの現象学のマルクス主義的解釈と機能言語学の提起等を経過しなければならなかつた。そして、シュツによって本格的な現象学的社会学が成立するまで、現象学が生活世界の科学として成立しているとは言えない。

近代合理主義から産み落とされた科学主義によって20世紀には現代科学技術文明が成立した。その時、現象学は科学主義が大衆化した主客二元論を批判し、その短絡性から生じる暴力を告発しつづける反近代思想である実存主義や生の哲学を援護した。反理念主義、反合理主義、反意識主義が19世紀の実存主義や生の哲学への共感する現象学の課題である。

この共感の源流をパスカルの反哲学に見ることができる。近代合理主義の形成期から、西洋哲学の伝統として流れる理性批判の伏流、その直感として反哲学と呼ばれた反意識主義等々の思想があった。

しかし、反哲学は哲学の主流に対する反抗や異義申し立てに過ぎない。反哲学の直感が、新たな時代の人間学の基礎となるためには、その直感に含まれている全体的な人間への理解の地平が、伝統的な哲学を包み込む次元にまで展開される必要がある。

現象学が生活世界の科学として展開されなかった思想的原因は、現象学の哲学的命題は、対象世界の記述を試みるには、あまりにも困難であったと言える。

近代合理主義によって確立した主客二元論を乗り越えるために間主觀の概念を提起したフッサー現象学も、人間社会学の科学認識論となるには時間が必要であった。つまり、言語、文化的シンボル、無意識、集合表象などの概念形成の中で、現象学で提起した間主觀性の証明問題は間接的に確立していく。その結果、意識哲学は結果的に乗り越えられることになる。

現在、哲学は人間学の基礎理論であるという解釈や、認識論は人間社会学の科学性批判であるという哲学運動の流れの中で、生活世界の学の成立条件

を確立するための前哨段階が確立したと解釈できる。

しかし、反意識哲学への批判は、寧ろ哲学の中ではなく、20世紀初頭から展開されるソシュールの一般言語学やフロイト精神分析学の中で開花した。その後、構造主義と呼ばれるレビ・ストロースの文化人類学やピアジェの発生心理学に受け継がれた。また、集合表象の概念を展開するデュルケイムの機能主義社会学などでも、意識哲学を越える人間社会学の概念が提起された。さらには、ヴィドゲンシャタインの言語ゲームの概念も、言語としてある意識がある意識に規定されて成立している言語の名目性を示すことで、意識哲学の成立している根拠を暴露した。20世紀の人間社会学の主流は、科学主義が持ち込んだ主客二元論と素朴实在論を批判する勢力となった。

4-2、生活主体を含む科学性の成立条件

生活世界の観測者は観測対象である生活世界の中に存在しているため、生活の主体の観念形態、価値概念を前提にして、生活世界の観測行為を行っている。したがって、生活世界の科学は、生活世界の認識主体の観念形態を前提にして成立している。そのため、文化的に異なる空間でそれぞれ独自の認識の在り方と生活世界の科学が成立することになる。

したがって、生活世界の科学は、ある特定の文化的、歴史的な生活世界の価値観、イデオロギーや文化的固定概念をその科学性の中に所有することになる。生活主体の共同主観的な「認識構造」や「倫理観」が紛れ込むことを防ぐことはできない。一般に、共同主観的科学認識を前提として成立している人間社会学は、同時代の文化や生活世界の文化的観念形態をその科学性の中に含む宿命であると、自覚しなければならない。

認識主体の科学理論の背景を具体的に対自化する作業、つまり科学認識論的点検は、その科学の公理系の枠内で確立することは不可能であり、この科学の科学性や科学方法論を批判するための作業を生活世界の科学の枠外に保証しなければならない。その為に、二つの作業が提案される。

その一つ目は現象学的な科学認識批判である。しかし、生活世界の科学性を哲学的反省によって対自化する作業は、科学の文化性や歴史性によって生じる問題点を具体的に指摘することは出来ない。現象

学的な哲学的反省では、生活世界の科学がもつ間主観的な科学性の宿命を述べるに留まり、その具体的な分析を進めることは出来ない。

そこで、二つ目として、生活世界の科学を文化的、歴史的、公理的な三つの空間に相対化し、その差異について比較検討する点検の方法を提案してみる。その第一番目の視点は、比較文化論の視点に立って、つまり文化的空間に観察者の生活世界の様相を相対化することで、依拠する生活世界の文化的構造を理解しようというものである。例えば、アジア学など、これまで、アジア諸国の生活や民族文化の研究がなされたが、その成果を日本の生活学の中に持ち込み、日本という特殊文化の構造の分析の補助として活用する試みである。

その第二番目の視点は、生活世界の歴史分析である。この課題も過去の生活様式の分析を通して、現在の生活様式を理解する方法である。歴史学や考古学的に生活様式を研究するだけでなく、現在の生活形態に比較することで、つまり生活の考古学と考現学の差異から、生活空間の理解を深化する試みである。

その第三番目の視点は、異なる公理系から生活世界の現象を解釈し、その差異を通じて、自らの依拠する科学性を相対化する試みである。例えば生活情報を、経済学的視点から、文化人類学的視点から、あるいは言語学的視点から見れば、異なる解釈が成立する。このように、生活世界の在り方も、その分析の切り口によって異なる解釈を与えるものである。

以上の、三つの学際的批判を通じて、生活世界の科学の点検をその科学の公理系の枠外に保証することができる。そして、この人間社会学的な点検をつうじて、現象学的な生活世界の科学性を反省的に点検する作業の材料が揃うことになる。現象学的な科学批判のなかで、生活世界の科学の科学性、認識構造、精神構造の対自化とその分析が展開されることになる。

4-3、複公理系の科学と構成的方法論

生活世界は複公理系の科学である。生活要素を有効な諸科学の手法を援用して理解しなければならない。この方法を学際的研究と呼ぶ。

生活改良のための実践的知としての生活学は、解釈に有効な論理を異なる分野から持ち込むことにな

る。生活病理への対策が基本的な学際的研究の前提であるため、異なる学問領域の論理を羅列するプラグマチズム的な科学方法が生活学の科学性の基調を作り出してしまうであろう。

生活世界の科学は、少なくとも学際的領域間の相互解釈が可能になる公理が必要とされている。そのため、近代科学の伝統的な方法論、実証的で分析的方法論を持ち込んで、新たな公理の確立を試みるなら、これまで生活科学が専門分野に細分化していた傾向を止めることは出来ないだろう。

例えば、食生活における栄養問題は、栄養成分の化学的組成の分析や生理的な反応などの研究として発展するのだが、分析的な研究によって精密に理解された栄養化学や生理学的な結果の集体系から食生活全体が理解できるとは限らない。食物科学や栄養学を構成する課題は、化学物質に関する理解のみではない、医学的や社会学的な視点から健康な食生活を課題にする理解が求められている。これまでの生活科学の分析的方法論は化学的知識に生活世界の課題を摩り替えてしまう傾向にあった。それでは、食生活の栄養問題が正しく見えてはこないのである。

自然科学を代表とする客観主義科学の方法で生活を研究すると同時に、文化人類学的、社会学的、経済学的視点と、異なる切り口から、解釈する必要がある。そのことによって、今井光映が批判的に指摘したような生活世界の細分化を避けることが出来る。

生活世界の科学は、生活全体を対象にする科学的方法が必要である。しかし、全体的に生活を対象にするという曖昧な視点から科学は展開しない。明晰で判明な生活世界の科学性は、やはり伝統的科学が示すように、分析的な方法論が必要である。

生活科学が、生活世界の細分化を避けるために、分析的方法と共にさらに総合的に生活実態を理解する方法を必要としている。分析的で総合的な方法を構成的方法と呼ぶのだが、生活実態の研究では、例えばケーススターディの中で予備調査された課題を社会統計的に実証する方法が確立している。

生活世界の解釈学は学際的、つまり複公理的であり、また各公理系に附隨する方法論から一つの仮説を各々検証する構成的な展開が必要とされる。構成的方法論を生活世界の科学の学際的研究の科学

方法の一つと考えたい。

4-4、臨床の知としての理解科学

家政学は没価値的な実証科学ではなく、生活全体の理解科学であり、「生活を癒す」臨床学であると今井光映は提起している。現実世界の生活改善と生活病理の対策を課題にした実践学の精神は、家政学の創設以来の伝統である。その意味で、この科学は科学のための科学ではなく、生活の価値観を前提とした生活改善のための科学である。

アメリカで家政学が生まれて以来、この学際的科学はそれぞれの時代の生活の課題と共に、その学問自体が変化し続けた。

例えば、主婦が女性の仕事の中心であった時代では家政学の研究対象は家庭生活であった。女性が社会で働きだすことによって、その対象は職場を含めた広い意味での女性の生活環境となり、家政学は生活科学へと発展した。

さらに環境問題が生活環境の重要な課題になる中で、生活の場は生態環境も含めた生活空間へと広がり、生活科学はさらに入間生態学として展開した。1960年からアメリカのコーネル大学では家政学科を人間生態学科に改組し、1970年代にイギリスのサリー大学が家政学を人間生活総合科学として位置づけているように、臨床の知としての理解科学である生活世界の科学はその実践と教育の在り方に直接的に関係し、自らの学問の在り方を自己変革してきたのである。

5、人工物システム科学としての生活世界の科学

吉田民人は、21世紀の科学は「科学の科学ではなく人間とその社会のための科学」という視点に立つ必要性を述べている。また、その科学は、社会文化的産物を対象にした、もしくは生産するための知の体系、つまり人工物システム科学であると提案している。⁽⁹⁾ 生活者のための科学である生活世界の科学は、すなわち人工物システム科学に属している。

このことから人工物システム科学と生活世界の科学の基礎理論として提案することが可能である。何故なら生活世界の科学は、人工物の構造・機能を決定しているシンボル記号、つまり言語構造から成り立つ時代性や文化性の観念形態を持っている。生活世界の観念形態を生活世界の科学を構成している科

学性と考え、その公理体系を生活世界の人工物プログラム科学であると解釈することができるからである。

言い換えると、生活世界の科学は、シンボル記号によってプログラム化され構築されている生活世界についての解釈学である。言い換えると生活世界の科学公理系の確立とは、その理論に基づく人間も社会のための有効なプログラムやシステムの開発が前提となっている。文化記号学的解釈を前提にした生活世界の社会文化システム科学の展開は吉田民人の提案する「人間と社会のための科学」という科学哲学を前提として可能となる。

引用文献

- 1 三石博行 「科学技術哲学と社会システム論」
in 『社会システム論』 新田俊三編
日本評論社、1990.3 pp57-83
- 2 高橋正立 生活世界の経済学・経済本質論序説-
ミネルバ書房 1988.12 391p
- 3 三石博行 「マルクス経済学批判と科学技術論」
in 『龍谷大学経済学論集』 第34巻
1号、1994.6、pp45-63
- 4 E フッサー フッサー、木田元訳 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』、
中央公論社、1967.4、pp174-221
- 5 今和次郎 『生活学 今和次郎集5』 1971.9、
505p
『考現学 今和次郎集1』 1971.1、
544p
- 6 篠山京 『国民生活の構造』 長門屋書房、
- 7 青井和夫、松原治郎、副田義也編 『生活構造の理論』 有斐閣双書、東京、1971.11、
324p
- 8 今井光映、山口久子編 『生活学としての家政学』、有斐閣、東京、1991.9、
- 9 吉田民人 「俯瞰型研究の対象と方法「大文字の第二次科学革命」の立場」 in『学術の動向』 第5巻第56号、2000.11
36-45pp